

2024 SHOC project スタディーツアー 報告書

[日程・活動地・参加者]

2024年 8月30日(金)～31日(土)

福島県いわき市

計4名で参加。

[活動目的]

いわき市を訪れ、コラボさせていただいているふくしまオーガニックコットンプロジェクトの方からのお話を通して団体の活動について学び、コットン畑を見学する。また、畑の管理に関してアドバイスをいただく機会にする。そして、東日本大震災に関して現地を回りながら学び、自分たちの活動の目的を再認識すること。

[活動内容]

(1日目)

①古着仕分け、コットン畑

この日は、悪天候で土の状態が良くなかった為、畑作業から古着の仕分け作業を行うことになった。この古着ボランティアはNPO法人ザ・ピープル主導の、今年に入って34年目となる活動だ。古着は地元や他の地域から集められたもので、いわき市ではごみの分別場所に衣類をリサイクルするスペースが置かれている。東日本大地震以前から行われていたため、避難指示が出されて家に帰れなくなり避難所での生活をしてきた方に衣類配給を迅速に行うことができたという。大人の春、夏、秋服と冬服および子ども服、その他と仕分けていった。



↑仕分け用の箱と、集まっている服の山

状態の良いものは経営されている古着屋で販売し、そうでないものは工場で使うウエスや、海外へ送ったりする。およそ2時間仕分け作業を行った。他の都道府県でもいわき市のように、お店に行かずとも衣類回収ができればリサイクルに繋がるのではないかと考えた。しかし、都内など人口が多い地域では回収量の多さや人手不足などで実現することが難しいのかもしれない。

次に、オーガニックコットン畑を見学した。



↑上神白のコットン畑、収穫可能な茶綿

震災当時、福島は放射線を浴びた土の安全性を確認できず食物などを植えることができなかった。そこで食べる目的以外で何か植えられるものはないかと考えた末、コットンがあげられた。以来、コットンを栽培してTシャツ、ハンカチやベイブ人形などの製品が生み出されている。オーガニックの基準は5年以上、化学肥料や農薬を使っていない畑で作物が育てられていないことである。ここは日本古来の茶色と白色の綿が栽培されていた。畑内にあるお手洗いはバイオトイレといって、用を足した後そのまま肥料として使われるエコ仕様となっている。地元の小学生なども収穫作業をお手伝いしているそうだ。地元のネットワークを繋ぐ場としてもコットン畑が活用されていて地域コミュニティの活性化に役立っていると実感した。また、他にも柿、栗、バナナ、里芋も植えられていた。まだ学内の畑は収穫時期ではない為、こちらの畑で一足先に収穫体験をすることができた。

②ららミュウ、ワークショップ

いわき・ら・ら・ミュウの1階にある店舗で、昼食にいわき名物の凍天やたこ煎餅をいただいた。

その後、2階で開催されている東日本大震災展を、ザ・ピープルの方からの解説を聞きながら見学した。これまで何度も東日本大震災について学ぶ機会があったが、実際に震災を体験した方々の話を直接伺うのは初めてで、非常に貴重な経験だった。当時の被害状況や復興の様子を詳しく知ることができ、水道が約1ヶ月以上使えなかったという話が印象的だった。

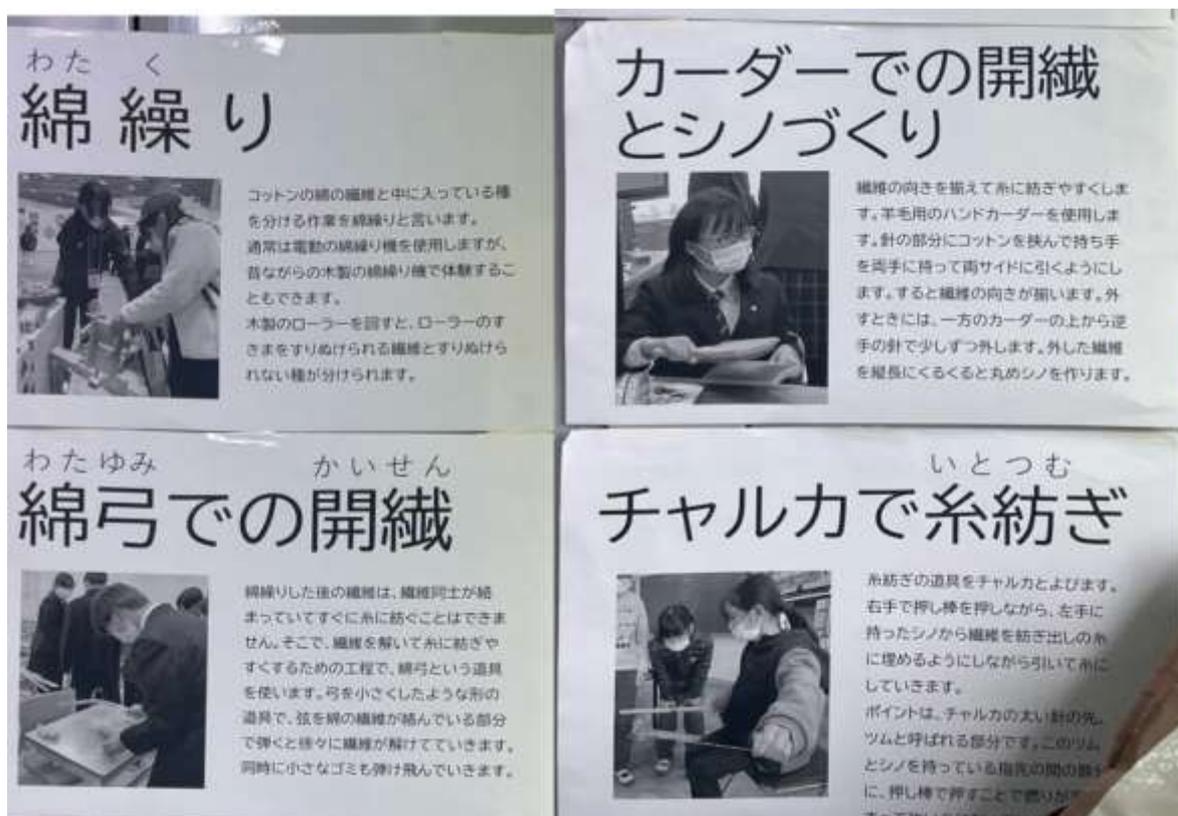
また、特に興味深かったのは、災害ボランティアについての話だ。多くの人が「自分が現地で役に立てるのだろうか」と不安に思うかもしれない。しかし、実際に災害が発生し、混乱が広がっている現場では、ボランティアの存在は非常に心強いものだという。ザ・ピープルの方は、東日本大震災を経験して「人手は多ければ多いほど良いし、1時間や30分の短時間でも来てくれるだけで助かる」と話していた。瓦礫の除去や物資の運搬といった体力が必要な作業だけでなく、物資の整理や、不安を抱えている人々と話をすることも、重要なボランティア活動になるという。災害現場では決して人手が十分になることはなく、どんな小さな支援でも役立つのだ。この話を聞いて、私は「自分に何ができるか」と気負いすぎるのではなく、まずは気軽に関わるのが大切だと感じた。



↑当時の段ボール仕切りの避難所が再現されていた。

いわき・ら・ら・ミュウを訪れた後、ザ・ピープルの事務所で、コットンを糸にする糸紡ぎと、コットンを使ったライオンのストラップ「ベイブライオン」の作成を体験した。

糸紡ぎでは、初めて見る道具をたくさん使用し、4つの工程を経て、丸いコットンを細い糸にしていく作業を行った。想像以上に簡単で、丁寧な指導のおかげで、時間を忘れるほど楽しく作業できた。日頃から作業を行っているザ・ピープルのスタッフの方々は作業が非常に早く、さすがの熟練ぶりであった。



↑糸の紡ぎ方

その後、コットンを使って「ベイブライオン」のストラップを作成した。顔が描かれた球体に、コットンを接着剤で貼り付け、たてがみを表現した。とても簡単に作れるため、小さな子供でも楽しめそうだ。コットンの貼り付ける位置や大きさを工夫したり、ビーズで飾り付けたりすることで、世界に一つだけのベイブライオンが完成した。



↑バイブライオン

(2日目)

③請戸小

2日目、いわき市から南相馬市に移動し、震災遺構である請戸小学校に向かった。はじめは震災が起こる前の南相馬市のお祭りの様子や請戸小学校の様子が写真で飾られており、その後被災した校舎に進んでいく経路になっていた。校舎の中ではガイドの坂本様が震災以前と当時の地元の方々のお話をしてくださった。私が請戸小学校に来たのは二回目だったが、当時の状況を詳しく教えてくださり、また違った視点で見ることができた。1階は1・2・3年生の教室と保健室や放送室などがあったが、教室と思われる場所は机、椅子が一つもなく壁はところどころ剥がれ、殺伐とした空間になっていた。



↑請戸小学校 1階

放送室の機械や校長室の金庫は倒れ、天井にぶら下がっていたと思われる照明はバキバキに割れ、床に無残に落ちていた。

また、教室の壁には時計が流されずについていたが、全て同じ時刻で停止しており、その時刻は津波が校舎に到達しブレーカーが落ちた、津波到達時刻であると解説があった。

震災遺構となった校舎には当時の請戸小学校の児童たちの様子を描いた絵本のページとともに解説が載った看板を辿ってゆく順路となっており、より当時の様子を想像しやすかった。

次に体育館に進んだが、室内は床がくぼんだり板が剥がれたりしていて、当時卒業式を準備していたことを想像させる体育館舞台上のおめでたい看板がより残酷さを際立たせていた。

別の棟の二階では当時の津波の映像やドキュメンタリーの上映、当時の大人たちの悲痛な声が並べられていた。特に教室の黒板に張られていた当時の児童たちが震災10年後に当時のことを振り返った作文が印象的で、じっくりと読んでいる来場者が多く集まっていた。ほかの県に疎開した子や就職でまた南相馬に戻ってきた子など様々で自分の知らない、大きな環境の変化を経験した子どもたちがいたことに驚いた。

最後に請戸小学校の児童が徒歩で逃げた大平山を坂本様が示して下さり、徒歩の避難の大変さを強く感じた。映像で知ることと実際に現地で肌で感じ、さらに当時の地元の人々の体験談を聞くことは全く異なるものだと感じた。

④その他、道中ガイドでの説明

坂本様は車内でも多くの事をご説明して下さいました。以前までは除染した土が入った黒い袋が、至る所に置かれていたが、今回はほとんど置かれておらず、中間貯蔵施設へ持っていかれているとのことだった。中間貯蔵施設の土地は、地元の人が譲った所もあるそうだ。最終的にはこの場所が最終処分場となってしまうのではないかという懸念もあがっている。

廃炉を進めている福島だが、新たなエネルギー発電法として太陽光パネルが多く並んでいた。中には山を削って作られた所もあるそうだ。これらは30年ほどが替え時なので、どのようにして廃棄するのか問題となっており、次世代への負荷がかかってしまうという。原発でも、太陽光パネルでも、当初は良いとされていた発電法が未来的に考えるとデメリットが大きくなってしまっている。今一度、エネルギーの使い方を考え直す必要があるというお話が印象的であった。

山間部は除染が難しく、放射能が高い所も未だあるそうだ。



↑このようにまだバリケードがあり、許可証が必要な場所もある。

双葉郡は田んぼであった場所が草だらけであったり、家も少なくなっている。また、人や車の通りも少ない。震災後は避難先に定住する人も多く、人が戻ってこないことが問題となっている。学校の生徒数も30名ほどと、若い人の数が少ないようだ。基本的には、集合住宅付近にスーパーや学校が集まっていた。しかし、そこから少し離れた場所になるとお店が少ないため、高齢者などは買い物に行くことが難しいという点も課題となっている。これから、福島の地元住民が暮らしやすい地域にするための改善が必要になってくるだろう。

坂本様のお話の中で知ったことの1つとして、紙芝居で震災のことを伝える岡洋子さんという方がいらっしゃるようだ。資料館などで震災や原発のことを知ることも大切だが、地元住民の視点からだと、一部は美化されてしまっているものもあるという。このことから、実際に福島で東日本大震災を経験された方のお話を聞くということは、ありのままのお話であるため、心にささるものが多いと思う。また、そういったお話は、様々な人へ伝えていくことが必要だと感じる。もし機会があれば、私たちも震災を経験された方のお話を聞くということを多く行っていきたい。

地震の初動を確認したら、まずは家の中の逃げ道を確保することが大切だとおっしゃっていた。ハザードマップもあるが、実際地震があったらパニックになるかもしれない。また、マップ通りに逃げると皆同じルートになるので、渋滞が起こるといふ。実際資料として残っていた、道路に並ぶ車の多さには驚いた。日頃から自分で調べ、見つけて判断していく事が大切だというお話が印象に残っている。

ガイドの申し込みはどのような方が多いのかお聞きしたところ、社員研修や外国人のレポーター、学生等がいらっしゃるとおっしゃっていた。2, 30代は少ない印象とのことだった。私たちが毎年開催しているスタディーツアーのように、継続して訪問することで、福島の知識の定着、毎年の変化を自分の目で見て感じる事ができ

る。温度感や気候、匂いなど、現地でしか得られないこと、お話がある。いわきの人々と聖心女子大学とのご縁をつないでいくために、皆さんの想いを広めていくために、自分たちの足で学びに行くことを大切にしたい。ツアーに行って終わりではなく、学んだことを周りに伝えていくことも大切だと感じる。今後は、聖心祭での糸紡ぎ、ペイブ人形作りワークショップにて、いわきの方々の想いを伝えていく機会としたい。